

---

# 傘もささずに

green age

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

傘もささずに

### 【Nコード】

N0019G

### 【作者名】

green age

### 【あらすじ】

降水確率50%、そういえば昨日の深夜のニュースで今日の午前中の天気をそんな風に言っていた。明日は仕事が休みなのに曖昧だな、とりモコンを片手にぼんやりと思っていたことをどこかに置き忘れていた。

耳のずっと奥の方で一定に刻まれたリズムが聞こえる。最初はそれを音の小さなメトロノームのように心地よく感じてそのまま身を預けていたのだけれど、霧があけるようにその音の正体が見えたとき、私はベッドから飛び上がった。降水確率50%

そういえば昨日の深夜のニュースで今日の午前中の天気をそんな風に言っていた。明日は仕事が休みなのに曖昧だな、とりモコンを片手にぼんやりと思っていたことをどこかに置き忘れていた。それでも半分の確率が期待に負けたか 新調したばかりの布団の柄を見つめながら頭をはつきりさせる。冷えた手を頬にあてて顔を拭くと、ベッドから降りた。

カーテンを開けると、空は灰色に覆われ、まだ小粒の水滴が無数に落ちてくる。風があるのかもしれない、こちらに吸い寄せられるように粒は窓を叩いている。外の外気がガラスを伝って表面から漂い、体を冷やす。私はその場から離れ、コーヒーでも入れようとキッチンへと向かった。

ぺたり、ぺたりと裸足の足がフローリングにくっつく。一步一步を踏み締める度に冷えが体を突き刺す。太陽の見えないこんな暗い世界である日は、妙に体が重く感じるのは何故だろう。電気のないモノクロの部屋は余計に寒さを滲ませて、それでも重い体を引き摺るようにキッチンに立つと生理的に身を震わせた。

鍋に水をためてコンロに火をつける。カチ、という小さな音が聞こえて、一度目を擦り、意識を手放した。その瞬間に変な違和感を覚えた。

無意識に直線の先にある玄関を見る。脱ぎっぱなしの黒いブーツ、

白いスニーカー、倒れた赤いパンプス、そしてその先にある薄いピンク色のドア。私はそれをじっと見つめながら、胸の奥で信号を発する違和感を右手で抑えるように、しかし足はゆっくりとそこへと向かっていた。違和感が、変な違和感が。

覚醒した頭で様々なことを思い巡らせたが、まさかと思う念が一番強かった。私は半ば慌てたようにドアノブを握る。ドアノブの金具は高揚した思考を落ちつかせるようにひんやりと手を冷やす。そして思い浮かべる、このドアの先にいるあいつの顔、いつもこのドアを開けたときにあるあいつの

「よっ」

「……何してんの」

ああ、そういえば髪の毛も起きたてのぼさぼさのまま、顔も洗っていない、化粧もしていない、可愛いことひとつ言えたものでもない。

だけど予想通りにドアの前に立っていた男の顔は、いつもと同じように照れくさそうに笑っていた。不器用に右側が釣りあがる笑み、目は半月の形。

男のお気に入りのストライプのシャツに、臙脂色のベスト、きつちりアイロンのかけられた皺ひとつない灰色のスボン。出会ったときからいつも「もっと若者らしい格好しなよ」って言うてるのに、男のスタイルはいつも変わらない。「これが一番落ち着くんだ」なんて年みたいなこと言って、でもあれから何年経ったのだろう。出逢って、しばらくして付き合って、ちょっと結婚のこと意識するようになって、一緒にいて数年経った今、私たちは年を重ねて、決して若者なんて言葉が似合わなくなって、そうしたら案外男の格好がじっくり感じるようになった、それはつい最近のこと。

「来るんなら連絡してよ、来たなら呼び鈴鳴らして」

「びっくりさせようと思ったんだ」

男はまだ微笑んだままこちらを見ている。背の高い私より少しだけ高い男の身長、だから視線もあまり変わらない。

「何言ってるの、いつから居たの？」

「ついさっきだよ」

「気付かなかつたらどうするの」

「気付いたから良かったよ」

呆気らかんと言う男の声色と言葉に呆れて、ぼさぼさの髪をかく。正直、怒る気力よりも会いに来てくれて嬉しい気持ちよりも、男がこんなことをしたということに驚きすぎて感情が全部吹き飛んでしまったというのが正しい。

男はマメな性格で、毎日必ず一通でもメールは欠かさないし、毎月のスケジュールもきっちり与管理している。男の上等なスケジュール帳を見れば今後の予定やその日の大事なメモが詳細に書かれているし、丁寧に赤ペンまで持ち出して一番大事なところには線を引くほどの徹底ぶりだ。

逆に私は面倒くさがりな性格で、その上見栄っ張りだから男と同じように上等なスケジュール帳を買ったのはいいけれど、中を見ればほとんど空白に近い。気付けば机の隅で埃に覆われてしまふ末路だ。「スケジュール帳が泣いてるよ」

なんて、泣きそうに眉根を歪ませて笑う男を見て、ああ、やっぱり凸には凹が合うのだなと手前勝手なことを思ったりもした。

そんな男が約束もなく家に来るなんて。確かに今日私の仕事が休みだということは知っていただろうけど、必ず来るときには電話でもメールでも一報を入れるのに。「びっくりさせようと思った」なんて、彼らしくない。

それでも男はいつもと同じように、細い瞳を半月の形に歪ませたま

ま。私の長い溜息にも嫌な顔ひとつせず笑顔のまま。

出会ったのはもう10年も前、まだ新入社員だった私が先輩に連れられて行った取引先の会社にいたのが男であった。男のいる会社は取引先の中では大きな会社であるため社員も慌しく駆け回っていた印象があるが、男はちょうど休憩中で、同僚と自販機の前で缶コーヒーを飲んでいたそう。

そこに私と先輩が通りかかった。私は下っ端だったから両肩に資料やら何やら荷物をふんだんに持っていたのだけれど、たまたま袋から赤鉛筆が一本転がり落ちてしまった。それは絨毯素材の廊下に落ちて音も鳴ることなく、静かにころころと男の足元まで転がり、そして当時気持ちがいっぱいだった私は気付かず廊下の奥へと去ってしまった。

さて赤鉛筆一本、たかが80円くらいの安いものだ。男も拾った赤鉛筆を見つめながらいろいろと考えたらしい。隣では同僚が「もちゃえよ」と言っていたそうだが、男は思ったそう。もしこの一本が何かを変えてしまったら、良い事だったらいい、でももしも残念なことがあってしまったら、ここが男の真面目なところで、今でも変わらないところでもあり、たまに男はこういうことをよく話す。

『もしも、もしもこのひとつが……』

特にそんな思考のない私でも、男のそういう考えを笑い飛ばさないのは、その赤鉛筆一本で私と男が出会ったからだ。今の私たちの長い、数年来の付き合いが生まれたきっかけが確かにここにあったから。

プレゼン会議が終わり、すっきりした顔で先輩と来た道を引き返しているとき声をかけられた。

「すみません」

振り向けば、今よりは少しだけ若い男の姿があった。スーツもまだだらけていないし、私よりも1、2歳ぐらい年上であるだけだろう。

というのはすぐにわかった。少しおどおどした様子で、しかし顔には満面の笑みがあった。営業の仕事でもしてるのかな、と思ったのが二番、一番は、自分達よりも明らかに小さい会社の人間である私たちに対して、こういった態度でくるのが珍しいと思ったこと。男の笑顔は初めて見たときから「特別」なものであった。誰もを引き付けるといふ表現をここまで体現出来る人っているんだと不思議に思った。そしてその笑顔が私に向けられていること、目に映っているのが私であることに、少しだけ嬉しいとも思った。

男は赤鉛筆を差し出す。「これ、落としましたよ」と。私の隣で先輩が小さく笑ったのにつられて、私も笑った。赤鉛筆、何本もあるからよかったのに。だけどせっかくだからと受け取ったときに触れた、彼の指先の温かさが私の笑みを止めた、戸惑わせた。私が瞬間は、と息を飲んだことを男は覚えていたみたいだ。

それを見たからこそ、いけるんじゃないかと思ってるね。男はその時のことを目の前にあるものを読むかのように嬉しそうに鮮明に話す。私はもうその記憶が薄らいでいつているけれど、男の話聞きながらあの時に時間を戻していくと、とても幸福な気分になることは確かであった。

子供の頃はまだ思い出や経験が少ないから、絵本や、新しく覚えた物事でそういう「ときめき」ってやつや「ときどき」ってものを味わうのдарうけれど、大人になった私たちは、過去の「ときどき」した経験にもう一度「ときめき」を思い出す。いつだって輝いているその思い出は、いつ帰っても変わらず輝き続けているから、色褪せずにもいつでも私にあの時の「ときどき」を重ねてくれるから、だから私はお母さんに「もう一回読んで」とせがむ子供のように、男に何度もそのときの話をしてしまうのだろう。ね、あの時はさなんて。

その場で電話番号を交換して、また会いましょうと分かれた、その

日に男から電話がきた。そして次の日には初めてのデートに向かっていた。律儀な彼であるから、何度もデートを重ね、お互いがどんな人間であるかを話しあった。どんな話をしていたかはもうお互い覚えていないけれど、毎度そのデートが楽しくて楽しくて仕方なかったことを覚えている。男から電話がくるたびに心臓が飛び跳ねて、男の笑顔を見るたびに心が解けて、今にも「好き」という言葉が喉から飛び出してしまうんじゃないかっていうくらいにこの恋愛に溺れて、男と出会って私の毎日が、ほんの些細なことから、起きるのが面倒な朝も、通勤ラッシュも、怒られたことも、全部が血の通ったもののように思えた。色が一点一点と増えていく、その血が骨になり、肉になっていく。確かに私はその恋愛にあった体温のよくなものを感じた。そしてふたりの手でそれを温める楽しさを。

長く一緒にいる間で喧嘩もした。一方的に私が怒鳴ることが多いけれど、滅多に怒ることのない男が怒ることもあった。別れようと何度も思った、実際にそのことを言ってしまったこともある。だけど一旦頭が冷えると、やっぱり男がどれだけ必要であるかということ、を、ひしひしと感じた。

私はどれだけ男に寄っかかり、弱い人間になっていくのだろう。でも男は言った。それでいいから、側にいてよと。あのときそっぽを向いていたから彼の顔は見えなかったけれど、その声色がどれだけ優しかったか、切なかつたか、胸苦しいものであつたか。

本当に胸に沁みていく言葉は、心を抉るような小さな痛みを伴っていくものである。

そういえばあの日も、今日のように小雨の降る肌寒い日だった。

「中入りなよ」

雨の音が強くなっていく。その分寒さも増している気がする。私はまた小さく身震いした。今日はきつと一日中雨なのだろう、アパー

トの廊下から見える空は厚い雲がかかっている。

ドアを開いて男を招き入れようとしたが、男はその場から動こうとしない。視線を男に向ければ、男はじつと私を見たまま動かない。いつもと変わらない笑顔のままだけど、また違和感が私の体の中に走った。

その半月の目に隠れているものが、ちらりと過ぎつた何かが、今までにない男を浮き立たせた。

「どうしたの？」

咄嗟に言葉を放った後に、男が何かに気付いたように顔の色を変えた。自分が今無意識に行ってしまった何かに気付いたかのように、小さな瞳が大きく開かれ、表情が強張る。

男の表情を前に、私は気持ちちが半歩下がった。本当は一步も二歩も後ろへ下がってしまったくらい驚いた。それを阻止することが出来たのは両腕を抱き締めていたから。体の奥で大きく高鳴った何かを抑えるように、腕を力いっぱい抱き締めたから。

こんな男の表情を、態度を見たことがなかった。無意識な癖とか、ぼんやり思考をしているときとか、そんなことは今まで数え切れないほどあったけれど、胸の奥で必死に私に訴えかけるこの違和感は何だろう。心臓がどうして飛び出しそうなほど動いているのだろう。いつもと少し様子が違うだけなのに。

戸惑いにそのまま言葉を紡ぐことが出来なくて、私は真一文字に唇を噛み締める。男は私の様子を両目に焼き付けるように見つめながら、ふ、と息をついたのが聞こえた。

「帰るよ」

「何で、今来たばかりじゃん」

男は俯いて、小さく笑った。笑い声が雨の音に消えて、空気に溶けた。男の言葉を言い返すことは出来るのに、「何でよ」という言葉が喉につまって出てこない。それ以上の言葉が思い出せない。男の

顔が俯いたまま止まって、何か言おうとしているのか間が空いた。それでもその言葉が続かないことを何となく察知した。

男はいつも自分の感情を表に出さない。

いつも自分の心の中に留めたままで、言葉にまで達しない。

聞いた方がいい、何かあったの？って。何かつらいことがあった？って。だけど男の俯いた顔を見ると、どうにも何も考えられなくなつて、私はドアを押し開いたまま男の顔を見つめていた。

男は何かを考えていたようだけど、意を決したように顔を上げ、そしてまたいつものように笑った。その笑顔にはもう何も過ぎっていないなかった。瞳の奥で何かが震えていたことも、私に何かを訴えかけようとしていた言葉も。

「顔が見たくなつたから」

「……何、唐突に」

「用事があつたから寄つただけだから」

男はまた微笑む。その手が伸びて、私の頭を撫でた。こんなことをされるのはもう何年ぶりだろう。私が仕事で失敗をしたりして落ち込んでいたときはいつも男のこの手に救われていた。優しく、壊れ物を扱うように撫でるその仕草と、一定のリズム。

雨の音と重なつた。

「じゃあ行くわ」

「大丈夫？」

男の表情が止まった。私はもう一度続けた。「大丈夫？」

男はどこかに答えを求めるように遠くを見つめ、一度小さく頷き、そして二度目は私を見て頷いた。赤鉛筆一本で出会つた私たちの、あの出会つた瞬間の男の笑顔。照れくさそうな、でも芯のある人間の深い深い笑みが重なる。あの青臭い香り、時間と空間を超えて私

にもたらすあのときの幸福感。

「大丈夫」

「気をつけてね」

「うん」

男の歩先が動く、靴が地面に擦れる音。

「用事が済んだらまた来てよ」

男は声を出さずに頷き、そして背中を見せた。ストライプのシャツ、臙脂色のベスト、灰色のスボン、黒く短い髪、細身の体、でも意外と広い背中。モノクロの世界の中で色の浮き立つ男の背中を見送りながら、一度も振り返らなかった男が階段を降りていく音を静かに聞いていた。

閉める気になれないドアにもたれていると、キッチンで沸騰しているお湯の音が聞こえた。火を止めなきゃ　そう思って体を動かしたとき、思い出した。

外は雨だ。

いつから降り始めたのだろう、アパートの外に生えている木々の葉は雨に濡れ、先から雫を落とし、打たれた雨に微かに揺れ続けている。灰色の雲がどっしりとした質量をもって空を渡っているのが見える。その重い体を引き摺るように低速に、南から北へ。

私は雨のリズムを聞きながら、つい先ほどのことを思い出す　男の服は濡れていたっけ、髪の毛も、スボンも。

傘、持ってたっけ　……

玄関から裸足のまま飛び出し、廊下から外を見た。下を見れば、男の姿がある。傘をさす人々をすり抜けながら、男は傘もささずに歩みを進めている。誰ひとり男を見ようとしない。誰ひとり傘をささ

ない男を振り返ったりしない。

ただ、男の着ているベストが透けていく。

臙脂色の、そうだ、あれは私と一緒に買い物行ったときに買ったものだ。男にこれを買いなよって私が勧めていたベスト。こんな渋い色似合うかなって照れくさそうに笑っていた男の顔。そのベストが雨と同調していく。雨の柄に染まっていく。ストライプのシャツも、ズボンも、溶けるように色が失われていく。

息を飲んで、見守った。

声をかける距離にあったのに、声が出ない。

裸足の足にじわじわと広がっていくコンクリートの冷たさに、指の先がすでに麻痺している。

彼の消えた道をじつと見つめていた。空はこんなに暗いのに、太陽の光を消しているのに、地上では色とりどりの傘が道をひしめきあっている。何かを吹き飛ばすように、雨を跳ね返すように。

それでも雨は空から地上へと落下する。彼の色を溶かし、それは地面に流れ、洗い流す。

さつきよりも粒が大きくなったかな？

背後から聞こえる電話の音が鳴り止まない。しばらくして留守電になって、発信音の後に慌てた友人が怒鳴り声をあげている。

「どこにいるの？今連絡がきてあいつが」

葉の先から雫が落ちた。その雫が真つ直ぐ落下するように私の心臓は突き刺され、全身の血は圧迫されて止まり、横隔膜が大きく唸って震えた。ぱきりと折れたように足が崩れ、私はその場に沈み込んだ。

「用事が済んだらまた来てよ」

もう一度、ゆつくりと言葉を繰り返す。男はこれに返事をしてくれたかな？「また来るよ」って言うてくれたかな。

「顔が見たくなつたから」  
なんて、何言ってるの。

スイッチを切り替えたように雨音が強くなった。  
それは私の嗚咽をかき消してくれる。

終

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0019g/>

---

傘もささずに

2011年1月11日21時05分発行